

訪問介護における高齢者の服薬に関する介護職の意識調査と啓発活動について

○平林文子*1、大道寺香澄*1、常山俊和*1、程嶋直子*1、大野理恵*1、俵木登美子*2、山岸大輔*3、玉井典子*4
*1(一社)くすりの適正使用協議会 くすり教育・啓発委員会 服薬ケア・コミュニケーション分科会
*2(一社)くすりの適正使用協議会
*3生活介護サービス株式会社
*4株式会社友愛メディカル

【目的】高齢者の訪問介護では食事や排泄、入浴の補助等が中心となり、薬は生命の維持に不可欠な存在であるが優先順位としては低くなりがちである。我々は介護職の服薬に関する気付きや薬剤師とのコミュニケーション向上を目的に活動しており、介護現場での服薬に関する「あるある」4コママンガやミニクイズをHPに公開している。2025年4月にマンガの公開数が20本に達することから、介護現場での服薬に関する課題を把握し薬剤師とのより良い連携状況について考察するために介護職を対象にアンケートを実施した。

【方法】2025年3月13日～23日に訪問介護に携わる全国の介護職を対象にインターネット調査を実施した。収集した調査結果を分類・整理し連続変数については要約統計量を算出し、分類変数については頻度集計を実施した。

【結果】回答者は402人で内訳は男性48.5%(195/402)、女性51.5%(207/402)、平均年齢は49.7歳(23歳~79歳)であった。訪問介護員としての経験年数は10年未満が48.3%(194/402)と約半数を占め、1勤務日あたりの訪問件数は平均5件であった。

日常業務での利用者の薬について、「困ることはない:37.3%(150/402)」、「服薬介助はしていない:9.7%(39/402)」を除く53%(213/402)が、何かしら困っていると回答した(図1)。困ったこととしては、薬の飲み忘れや服薬拒否、薬の量・数が多いが上位を占めた(図2)。

薬について困った時に聞く相手は事業所(上司、ケアマネ等)、看護師が多く、薬剤師は23.5%(50/213)だった(図3)。日常業務で薬剤師とコミュニケーションがとれないと回答した割合は62.4%(251/402)で、理由として「コミュニケーションをとる機会がない」が最多の79.3%(251/402)であった。どうしたら薬剤師とコミュニケーションがとれるようになると思うかとの問い合わせには、コミュニケーションをとる機会を定期的に設定するが最も多く、49.0%(123/251)であった(図4)。

訪問介護員の経験年数を10年未満/10年以上で区切って、薬について困ることを集計した結果、10年以上では薬の飲み忘が69.3% (79/114) であったのに対し、10年未満では飲み忘は57.6% (57/99) と低かった。一方で、10年以上では服薬拒否が39.5% (45/114) と低く、10年未満では56.6% (56/99) と高かった(図5)。

薬について日常業務でこれまでにあったヒヤリハットや知りたいこと等の回答(自由記載)に対し、単語の出現頻度にあわせて文字の大きさを変えて視覚化したワードクラウドを作成した(図6)。飲み忘れや落薬、間違い、認知症などの単語が見られたが、特に目立った傾向は認められなかった。

介護と服薬あるあるマンガ(図7)を知っていたのは16.9%(68/402)であり、印象として「介護現場の日常あるあるに合致している」と回答した割合は40.3%(162/402)であった。

図1 日常業務で利用者の薬について困る頻度 (n=402)

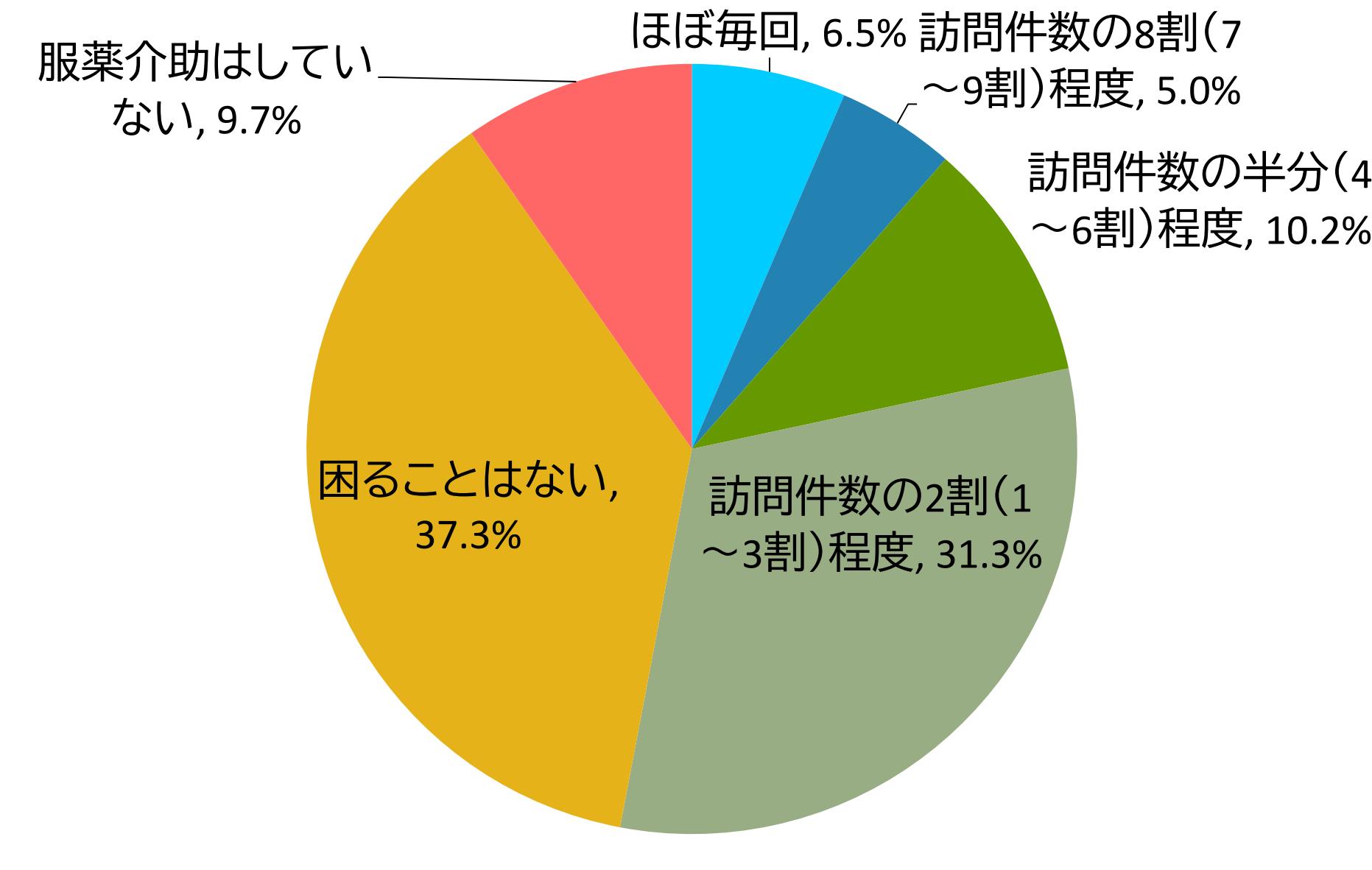


図2 日常業務で利用者様の薬について困ること (n=213)

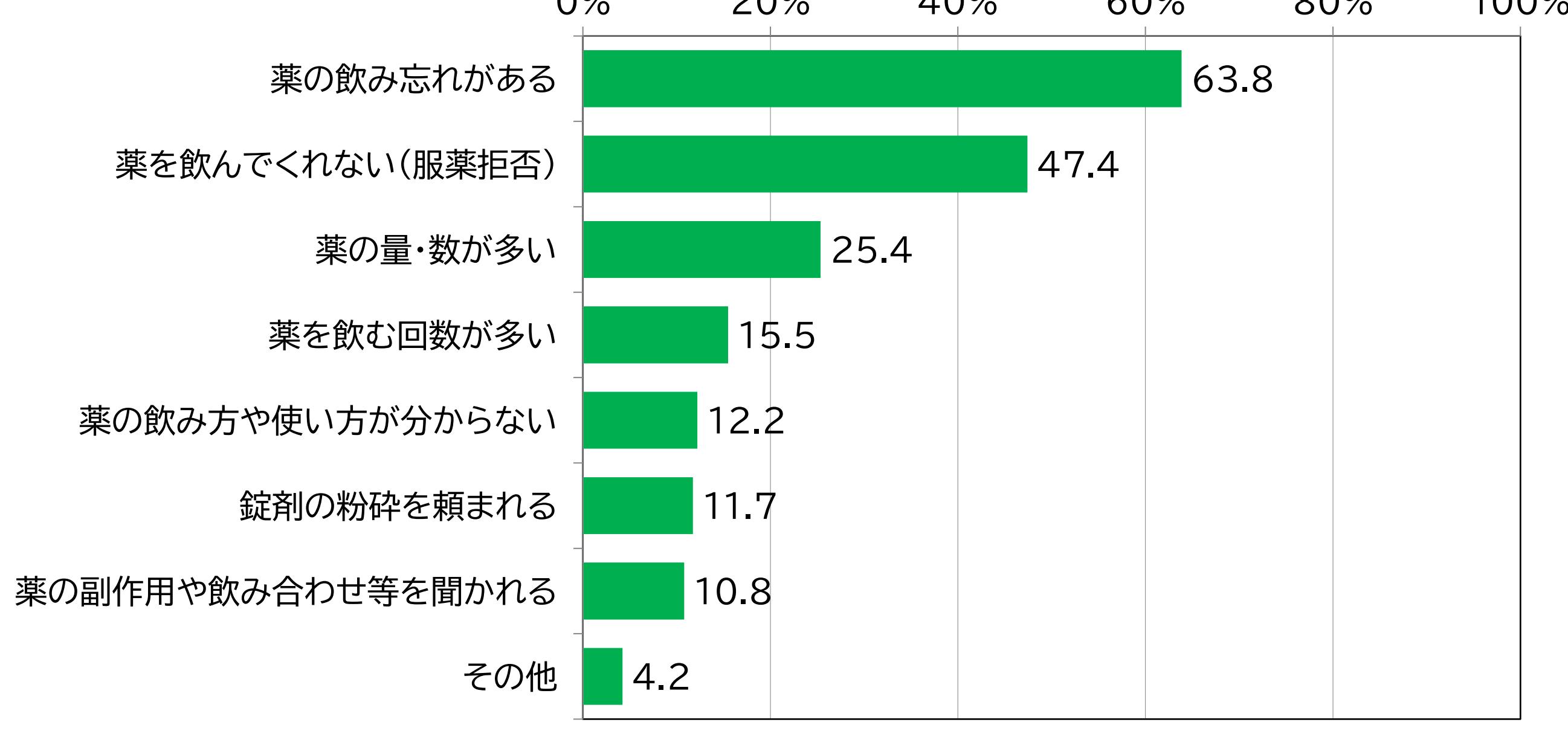


図3 困った時に薬について聞く相手 (n=213)

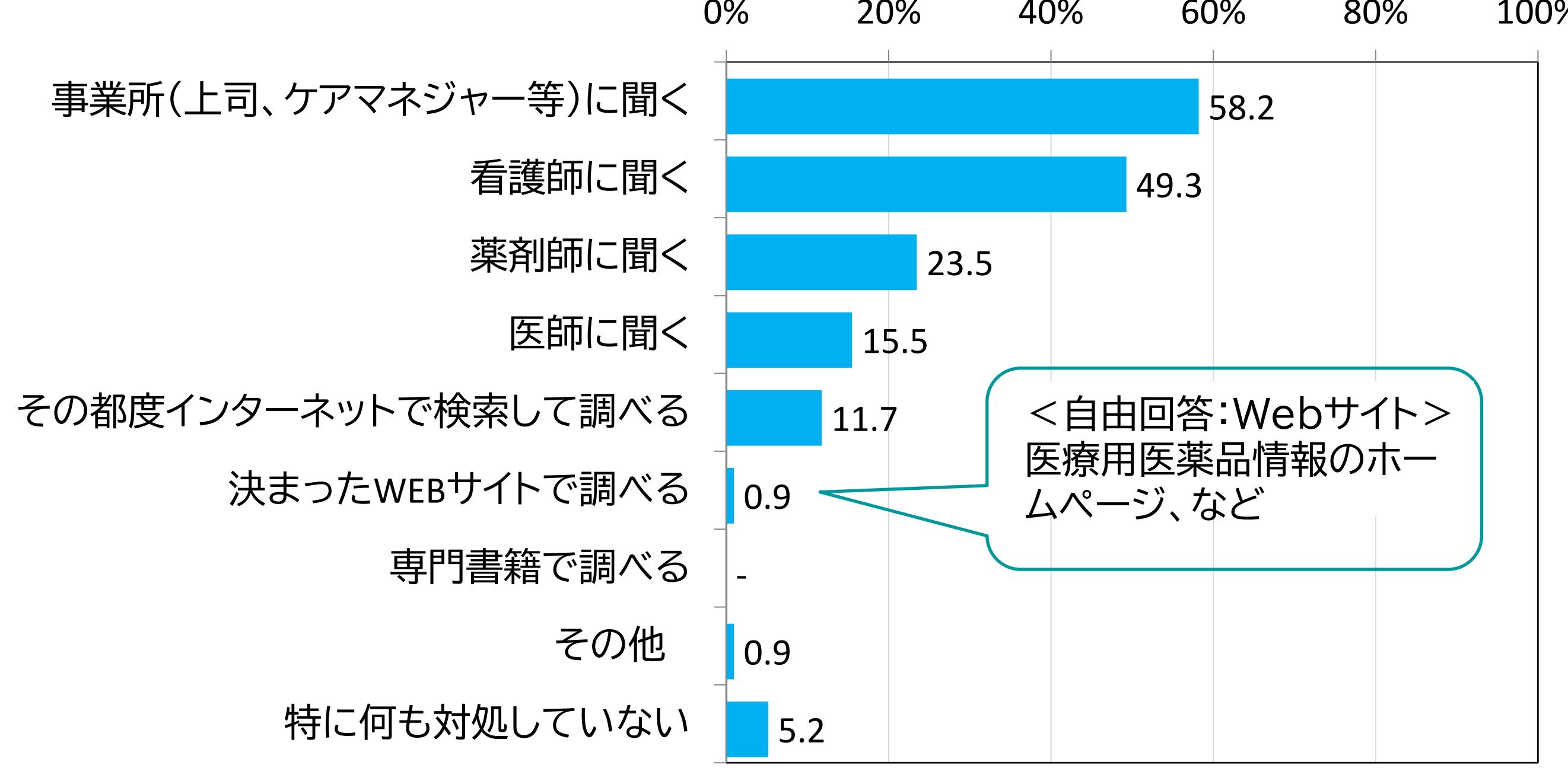


図4 楽剤師とコミュニケーションがとれない理由 (n=251)

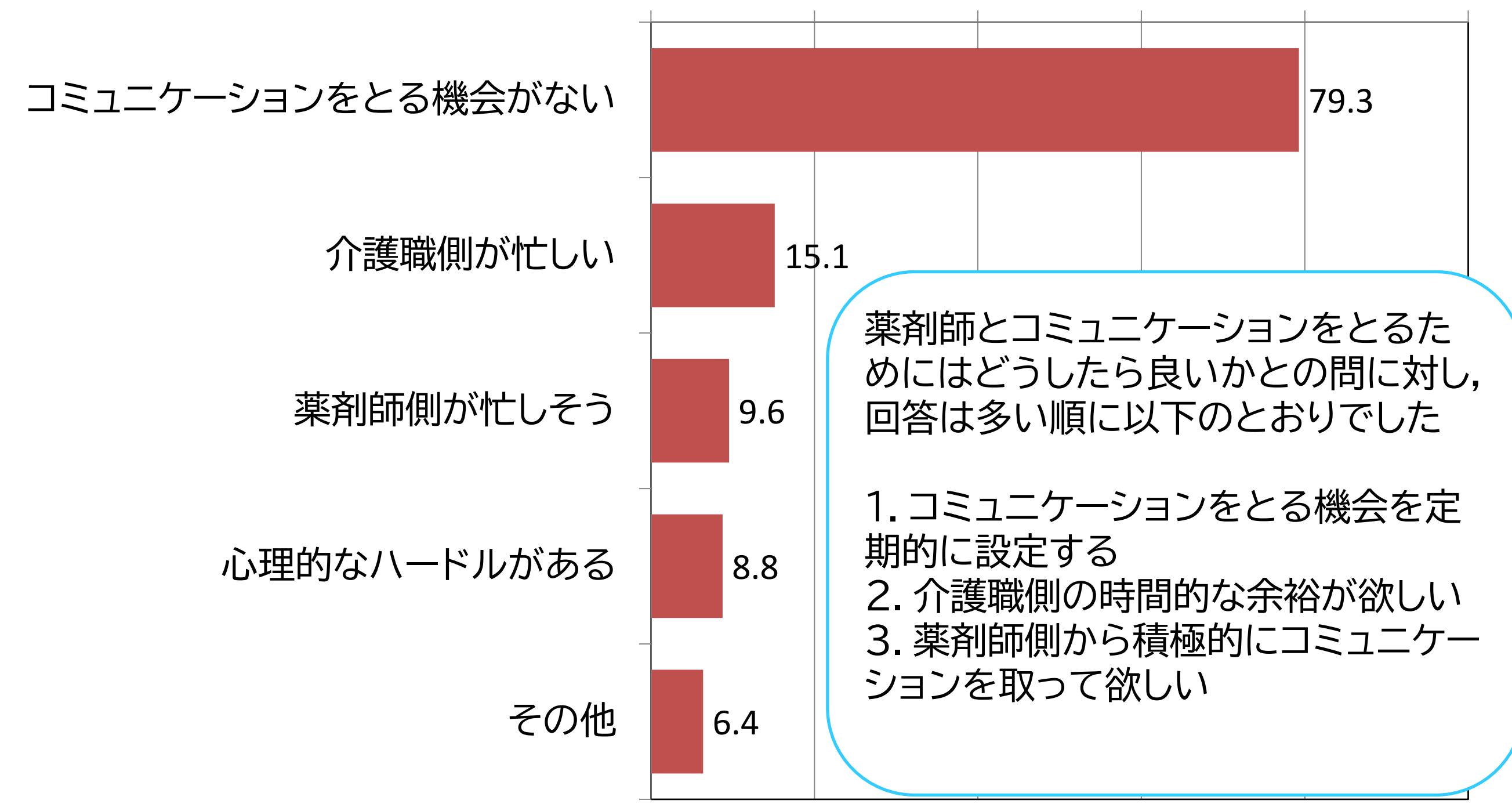


図5 経験年数別の困ること (n=213)

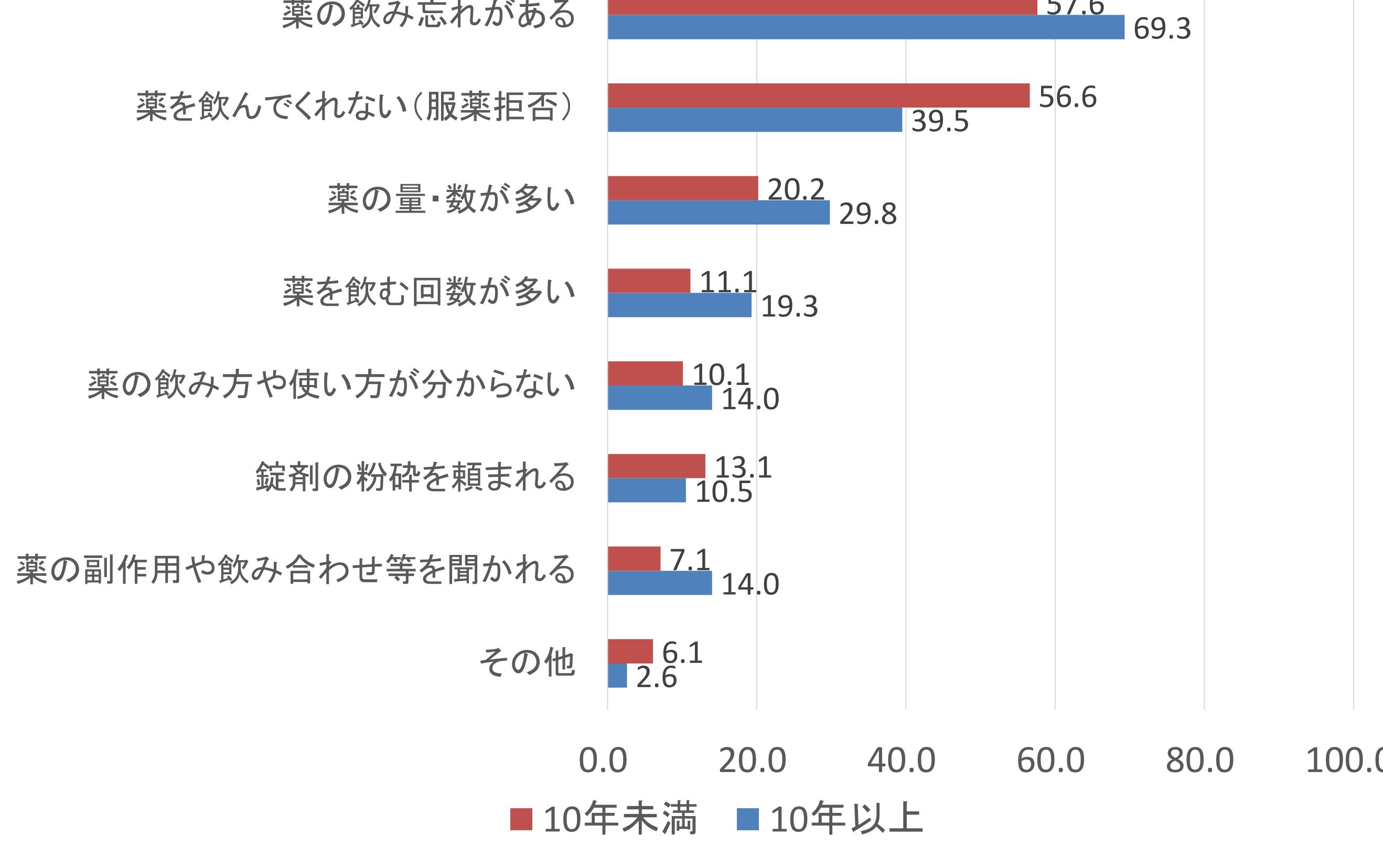


図6 これまでのヒヤリハット、要望など



【考察】利用者の薬について何かしら困っている訪問介護員が約半数おり、その際に事業所や看護師に聞いていることが明らかになった。また薬剤師とコミュニケーションがとれていない理由として、機会がないが約8割を占めた。経験年数別の困ることは、経験年数が長いと薬の飲み忘れに気が付き、経験が短いと服薬拒否で困る傾向が伺えた。訪問介護員に服薬の知識を得ていただく手段の一つとして、我々が取り組んでいる「介護と服薬あるあるマンガ」が一定の役割を果たすと考える。あるあるマンガは、訪問介護員が日常業務で薬について疑問を持った際、業務の合間にスマホで簡単に読めるよう工夫しており、薬剤師が問題の解決に繋がる存在であることを監修者コメントにて繰り返し啓発している。一方で、あるあるマンガを知っていたのは2割に満たなかったことから、認知度を高めるべく有効な周知方法を検討し、より一層の啓発を図っていく必要がある。

COI開示 筆頭発表者名：平林 文子 私は今回の演題に関連して、開示すべき利益相反はありません